

福島にはヒーローが必要：日本の責任と民主主義

By: 松村昭雄

2012年8月20日

([Fukushima Needs a Hero: Responsibility and Democracy in Japan](#))

山田恭暉氏は73歳。数週間にわたって米国を巡った同氏は少し疲れた様子だ。彼は日本国を救おうとしている。



山田恭暉氏（中央）

福島事故の内情を語る事のできる人に初めて直接お会いした。山田恭暉氏は、今でも高い放射能レベルが **TEPCO** の作業員を拒んでいる為に、昨年メルトダウンした3つの原子炉での仕事がいまだ終わらぬ事を憂慮している。内部には未だ核燃料集合体がある崩壊された建屋は不安定であり、地域の人々の長期間に亘る脅威となっているのだ。殊に冷却システムは懸念の原因である。「[福島原発行動隊](#)」創始者で理事長である山田氏は、700名のメンバーと共に現場の収束作業を担うことを希望している。

福島行動隊の背景根拠は、たとえ行動隊作業員が放射能により癌を発症しても、それには20年ほどかかり、彼ら（高齢者）の平均寿命はいずれにせよあと12～15年ほどである、ということ。山田氏は彼らのグループが捌くことのできる作業に、若者たちの命をリスクにさらすべきではないと信じている。彼の今回の米国ツアーで、アメリカが日本政府にこの災害に対し責任ある道をとるようプレッシャーをかけようとの支持を増やしている。

山田氏のグループもまた国際査定チームと同様に現場に入れるようになされるべきである。

現場の収束作業のほかにも、山田氏はTEPCOがこの長期に亘る問題に対応できる技術的能力を有しているとは信じていない。TEPCO自体も（同氏によれば）彼らに十分な技術的能力があるとは信じてはいない。山田氏によると、TEPCOの計画はこの先40年間で放射線を封じ込めることである。しかし彼は50年もしくはそれ以上を必要とするだろうと見ている。

危惧は直接の放射線被曝による癌だけではない。たとえTEPCOの見通しどおり進んだとしても食物連鎖の中での40年間もの放射線物質汚染が、日本に、おそらく近隣諸国にもかなり大きな影響を及ぼすであろうということである。

山田氏が米国に協力を求めようとするアプローチは、私が今年初旬にした事と同様である。残念ながら、私はその結果に大きな期待は持っていない。17ヶ月を過ぎて状況は悪化している。日本が独立査定チームを要請し、そのアドバイスを全うする為の莫大な費用を保証しない限り、米国政府は動かないであろう。たとえ、原子力廃棄物の保管問題、最近でた新規原子炉建設やライセンスの更新の禁令の件で同情的ではあっても、新任委員長アリソン・マクファーレンの下にある米国原子力規制委員会が主要案件でないことに、殊に大統領選挙を目の前にして、取り組もうとすることはないであろう。

私は山田氏の失望する様子に申し訳なく感じたが同時に、中央政府、地方政府、TEPCO、また報道機関も、悪化する状況について公言することに障害のある国の国家危機管理について、更なる危惧を増している。

この政治的・社会文化は国会の福島原発事故調査委員会 [委員長黒川清氏によりこう表現](#) されている。（国会事故調報告書英文9頁）

「・・・2011年3月11日の地震と津波は世界を震撼させる規模の自然災害だった。この破壊的な出来事により引き起こされたとしても、福島第一原発で引き続いて起こった事故は自然災害としてみることはできない。これは明らかに人災である。未然に予知予防ができるべきであった。そして、人間のより効率的な対応によりその影響は緩和できたであろうべきものである。

何故そのような事故が、工学と科学技術が優秀であるという世界的知名度に偉大な誇りを持つ国、日本で起きたのか。当委員会は、日本国民と国際社会はこの質問に対する十分で正直かつ率直な答えに値するものと信じる。ここで辛いが認めなければならないこと、この事故は「日本製」の災害であったということである。

その根本原因は日本文化の根深い因習にある。反射的な服従、権威に疑問を持つ事への抵抗、プログラムに固執する熱意、集団主義、そして島国根性、である。・・・」

日本文化が事故の一要因であったのかもしれないが、それは有益な告発とはいえない。責任がある者達に、容易であり許しがたいブレイクを与えることになってしまう。我々には日本の住民の健康と安全を、擁護する者達が必要なのである。

山田恭暉氏は、彼の国家を優先として自らの大きな犠牲を進んで払おうというのである。私は彼の努力に勇気付けられましたが、周到な体制である日本のロビー活動をするにあたっての彼の憤りを察するものです。

一方、別の視点での活動に（少なくとも年齢は）事故に影響された[友人の自殺についての演劇](#)を公演した相馬高校の3人の女生徒がいます。「福島友人」と自称する米国の若い仲間達が彼女らの勇気に感銘し、この演劇を世界中の人に観てもらえるよう英語字幕をつけました。

「福島友人」には、ドイツ、フランス、パキスタン他より夫々の言語に翻訳したいと申し出が来ています。民主主義国家において年齢に達した人々はその選挙権をもって意見を表す事ができます。しかし若すぎるなら、民主主義の焦点である筈のその機会は見失われるのです。しかし、[YouTube](#)がその機会を与えました。彼女たちのメッセージは絶望感の中に希望の鈴を鳴らすものでした。私には、相馬高校が何故[ビデオをYouTubeから削除](#)させたのかは理解し難く思います。（著作権侵害という主張）。学校は学生の勇気あるメッセージを検閲削除するのではなく励ますべきです。

これは選挙権のない若い人達の言論の自由を保証するという、民主主義の基本的問題です。

山田恭暉氏は高齢層のヒーロー。3人の女優さん達は若年層のヒロインです。私は中年層を恥ずかしく思います。最大の問題に取り組む権力を持つ中年層が弱体で、ストイックな文化という口実の影で畏縮していること。彼らが官僚制の匿名性に隠れ、変わりようのない現状に追従し、彼らの国の健全性が懸かっているという時に、己の経歴と名望を気遣い心配していること、を。

福島はヒーローを必要としています。現世代のチャンピオンはどこにいますか？

(翻訳：木村道子)